

# ■一般社団法人三重県鍼灸師会 平成31年／令和元年度 活動報告

第1回学術研修会・スキルアップセミナー

4月14日(日) 津市海浜公園

## 知的に走ろう！市民ランナーの為のランニング教室

講師：天理大学体育学部 講師 岩山海渡先生

今回は実技型の研修会として市民公開講座と併催して行い、運動とエネルギー代謝を専門とされる岩山先生から、運動学、栄養学、フルマラソンを2時間20分で走るアスリートとしての経験から、現在取り組んでいる食事と持久力、練習時間帯によるエネルギー代謝の違い、朝ランのメリット等について解説いただいた。

当日はあいにくの雨天で、予定していた屋外での実技は中止となったが、市民ランナーからは、栄養・水分補給、効率的なウォームアップなど熱心な質問を多くいただいた。



(報告：広報普及委員長 楠原秀一)

第2回学術研修会 療養費等適正申請指導会

5月26日(日) 三重県鍼灸会館

## 保険制度に関する周知事項

講師：(一社)三重県鍼灸師会 保険委員長 天野 治 先生

平成31年1月1日から「受領委任払い制度」が導入されてさまざまな課題が見え、終了予定時間を超えても多くの質問があり、関心の高さがうかがえる研修会となった。

療養費を適正に申請することは社会に対して責任を全うするということであり、われわれ施術者側にも誠意ある対応が求められるため、往療、頻回施術、医師への再同意など、療養費を取り扱う上での注意点について再確認が行われた。



(報告：学術委員長 奥田一道)

第3回学術研修会

7月15日(月・祝) 三重県鍼灸会館

## 「漢方薬と西洋薬の併用に関する最新知見」

講師：医療法人社団 山中胃腸科病院 齋藤孝仁 先生

齋藤先生を講師としてお招きするのは4回目で、今回の研修は西洋薬どうし、漢方薬どうし、漢方薬と西洋薬の併用、といった想定されるさまざまな組み合わせから起こる、多剤併用（ポリファーマシー）の問題について自験例を交えながら、また、鍼灸臨床で遭遇する可能性のある「内・外出血」や「気胸」、「皮膚炎」についても事例を紹介していただいた。

「漢方薬と西洋薬との併用」については、医師だけではその安全性を完全に確認することは不可能であり、鍼灸師を含むコメディカルの気づきと助言を求められ、鍼灸師も患者さんの服薬状況と内容を正しく理解しておく必要があることを学んだ。



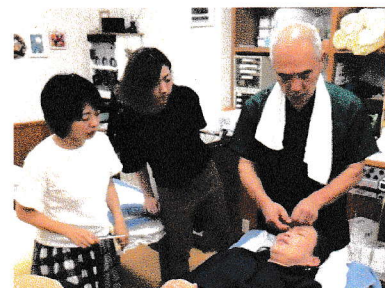
(報告：学術委員長 奥田一道)

## 後進に伝えたい30年の臨床経験

講師: でぐち鍼灸院 出口多賀司 先生

今年度から、県内各地の大先輩の鍼灸院にお邪魔し、「長年、普段の臨床現場での経験に基づいた知恵と技術を伝えてほしい」と企画したセミナーの第1回は、放射線技師として勤務経験を持ち、良導絡・脈診などを組み合わせて治療されている出口先生の院に伺った。

基本的な治療方針の説明から始まり、脈診の練習、良導絡体験、副鼻腔炎・星状神経節・坐骨神経・眼窩内への刺鍼を体験し、参加者同士での刺鍼練習を行っている中、患者さんが来院されて急遽治療を行うなど、現場ならではの場面もあり、院内備品の配置や掲示物などのこだわりも勉強になった。



(報告: 広報普及委員長 瀧本 一)

## 総合的な視点で病と向き合う

講師: 仲野整体整骨本院 仲野弥和 先生

第2回は元会長の仲野弥和先生(日鍼会前会長)。今回は元会長ではなく臨床家としての立場からお話しいただいた。

患者の生活様式や社会環境など、総合的な視点で患者さんを捉え、その中で何が問題かを分析することが大事。

私は弟子として5年間の研修生時代を過ごしたが、さまざまな職業、性格、年代、嗜好の患者さんの生まれたときから現在までのストーリーを引き出し、本人も気づかなかった自分像や病気に対する想いを丸裸にして認識させる作業が実



に上手で、等身大の自分に気付き、嬉しさのあまり泣き出す患者さんも沢山いらっしゃった。講義の後は、スタッフでDIYしたバーベキューハウスで、火を囲みながらのひと時となった。

(報告: 広報普及委員長 瀧本 一)

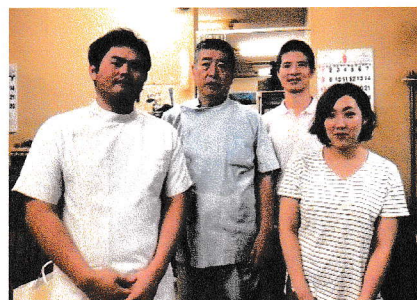
## 凝り固まった自分の考え方をほぐす

講師: 川内鍼灸科 川内栄二 先生

津市で開業されている川内先生の院で、SSPを用いた治療法と浅刺しとお灸を用いた治療法を見学した。

複数の患者さんを1人で対応し、素早い手つきで次々と施術していく姿は無駄な動きが少なく、治療の診断が的確で早いことが複数同時にできている秘訣なのかと感じた。

今年度の「スキルアップセミナー 先達に学ぶ」は3回開催したが、日々の臨床では、他の先生がどのような治療をしているか実際目にする機会は少なく、講師の先生方の考え方や知識や経験をお聞きして多くのテクニックを学び、凝り固まっていた考え方をほぐすとても良い機会になった。



(報告: 青年委員長 奥山敬太)

## 開催地の会員参加で子育てにやさしい地域づくりへ

本会は9年前より「みえ次世代育成応援ネットワーク」(県内企業や団体が協力して「子育てに優しい地域社会づくり」に取り組む地域密着型のネットワークです)のメンバーとして活動を行ってきた。

私達は子育ての中で「困った」を解決する選択肢の一つとして小児はりを提案し、毎回体験した子どもたちや家族の方にも大人気で、家庭でも行える方法も併せてお伝えさせていただいているが、今回は子どもたちに鍼に触れてもらう体験や、美容はり、姿勢・歩行分析、体の悩み相談を実施し、幅広い年齢層に鍼灸医学への興味を持っていただけたと思う。

非常に来場者が多い人気イベントで、このネットワークを使って他の子育て支援団体とのコラボや自分のイベントのアピールなども可能で、興味のある方はご相談いただきたい。(報告：広報普及委員長 瀧本 一)



## 新たな工夫で普及効果～県内初のフルマラソンケアへ

今回からの新たな取り組みとして5つの工夫(①ライングループで事前に情報共有を行う ②ケア活動参加メンバーの顔写真入り名簿を配布する ③ケアブースにBGMを流す ④待っているランナーたちに鍼灸広報VTRを見てもらう ⑤インスタボードを設置し、ランナーたちにSNSで拡散してもらう)をしたが、これによりメンバーの意思疎通が図れ、活動後の写真のシェアなどもスムーズに行うことができ、また、出走後の空き時間は活発な意見交換の場となった。

2020年冬には松阪マラソン(三重県初のフルマラソン大会を12月20日に開催)のサポートを行うため、現在、実行委員会と話し合っよう準備を進めている最中である。(報告：広報普及委員長 瀧本 一)



## 患者と向き合う時間を作ってくれる治療法「お灸」

今回で53回目となる三県(愛知・岐阜・三重)合同鍼灸研修会は、一昨年の日鍼会全国大会 in 沖縄において師会長間で意見交換をした際に、「オールお灸の内容はいかがか」ということで協議して開催に至ったもので、今回は岐阜県鍼灸師会の皆さんが担当されて開催された。

第1部は、Moxafricaの国際活動の現状と課題について、第2部は、お灸の教育の現状と課題、第3部は滋賀県草津市の穴村に伝わる伝統的な薬物灸である墨灸の歴史や、墨灸の作成方法について学び、実技も行われた。

次年度は愛知県鍼灸師会の担当で開催される予定である。

(報告：学術委員長 奥田一道)



## 睡眠医療と鍼灸医療の関わり方

講師：名古屋市立大学大学院医学研究科 感覚器・形成医学講座

耳鼻咽喉・頭頸部外科学教室 睡眠医療センター(ぐっすりセンター)部長 中山 明峰 先生

令和元年最後は、全日本鍼灸学会愛知大会でのご講演の聴講者からリクエストがあった中山明峰先生をお招きして開催した。日常臨床のなかで、不眠は多くの患者の皆さんが訴える症状の一つであり、県外からも数多く参加され、今回のテーマに対する関心の高さがうかがえた。「睡眠薬＝麻薬」「睡眠薬が眠症を作り出す」などショッキングな内容も飛び出したが、軽妙な語り口で参加者一人一人と顔を合わせてお話しいただくという講演のスタイルにより、あっという間の90分で、睡眠衛生指導の重要性や、「睡眠薬」として処方されている種々の薬剤について、正しい知識が必要であることを再確認した研修会であった。



研修会後に今回は忘年会を兼ね、講師の中山先生にもご参加いただき、研修会で質問しきれなかったことをたくさんうかがうことができた  
(報告：学術委員長 奥田一道／副会長 岡田 賢)

## 「また受けない！」スポーツ鍼灸の普及に向けて

今年もスポーツ鍼灸セラピー三重のメンバーを派遣してケア活動を行った。レース開始時は雪がちらついていましたが後半は晴れて気持ちの良いレース日和となった。

一般的にはレース前のウォームアップのお手伝いや、良いパフォーマンスを出せるように刺さないで貼る「はり」やテーピングで体を整え、レース後の痛みや疲労軽減のケアを行っているが、レースとは関係なく、日ごろから感じている痛みや不調の相談も多くあった。1人あたりに割ける時間は少ないが、私たちの持つ知識と技術を精一杯提供することができたと思う。今回は145名への施術を行い、ほとんどのランナーから高評価をいただいた。



(報告：広報普及委員長 瀧本 一)

## 新型コロナウイルス感染症対策を行いながらのケア活動

今回、新型コロナウイルスの影響で、大会中止や、規模縮小が相次ぐ中、青蓮寺湖駅伝大会は関係者の尽力で開催に漕ぎつけられ、私たちは手指消毒や、マスクなどの感染対策をして活動に臨んだ。

この大会は1チーム10名でタスキを継ぎ、企業や同好会など毎年たくさんのチームが参加して盛り上がりを見せている。このレースのケア活動は昨年からで、大規模なマラソン大会と違い、選手や大会役員との距離が近いことが魅力で、選手だけでなく、大会役員や地元の方が空き時間に訪れて談笑するなど、和気あいあいの雰囲気の中での活動であった。



3月予定の松阪シティマラソンは残念ながら中止となったが、来年度のケア活動や再来年度のとこわか大会に向けて、選手の皆さんのパフォーマンス向上と、安全で楽しいスポーツライフのサポートを続けていきたいと思う。

(報告：広報普及委員長 瀧本 一)